

会報陶冶 連載最終回

「ファミリービジネスの将来」

ファミリービジネスの強みは、ファミリーが創業以来の価値観・理念を繋いでいくことであると述べました。代表的な価値観には、社員や社会からの信頼・尊敬の土台である「利他の精神」や、イノベーションの源泉である「不易流行」があり、これこそが永続の必要条件になっているのです。そして、こうした価値観はそもそも四書五経という形で我が国に伝わり、徳川家・武士の家訓として明示的に意識されるようになり、民間レベルでは三井家や近江商人が家憲という形で経営の拠り所として受け継ぎ、寺子屋を通じて全国に広がっていったと考えられるとも指摘してきました。

しかし、最近の状況を見ると、四書五経を学ぶという機会は受験勉強以外ではほとんどなくなっていました。「道徳」という言葉にどこかお上による洗脳教育というにおいが感じられるからか、理念を実践して多大な業績を達成した偉人たちの業績を学ぶことも稀になりました。私の幼少時代には、二宮尊徳の銅像がどの小学校にもあり、「勤勉」、「世のため人のため」、「小を積んで大をなす」といった価値観が共有されていたように記憶していますが、今日ではそれが揺らぎ、「楽をして経済的に豊かになるにはどうしたらよいか」といったノウハウ本が街に溢れています。連載第 9 回で取り上げた平光雄先生の道徳の本が話題になるということは、教育の場でこれが実践されていないことの裏返し現象とみることもできるでしょう。

また、経営の現場でも価値観が会社全体で共有されその実践を通じて社会から尊敬され愛される企業を生み出す力、イノベーションが常に起こり技術力やサービス水準を真似することが難しい国際的に競争力の高い企業を産み出す力、こうした観点でも日本は後塵を拝しつつあります。古きよき伝統を守ると同時に、あくなきイノベーションを求める、その両面で日本を支えてきた実践力が弱まっているように感じるのは筆者だけでしょうか。

以前この連載の新年特集としてアベノミクスについて批判的に論じました。それ以降これまでの成果を検証すると、アベノミクスは予想通り株価や円安を産み出すことには成功しましたが、これが個人消費、設備投資、輸出という需要の力強い拡大を背景とした緩やかな物価上昇（ダイヤモンドプル型の物価上昇）には結びついていません。そればかりかコストアップによる物価上昇が実現し日銀が引き締めへ転じた際（いわゆる出口戦略）、財政健全化の道筋が全く見えていない中で長期金利の大幅な上昇や国債の発行困難化を招かずにスムーズに引き締め策を実施することが本当にできるのかといった「不都合な真実」が早くも意識され始めています。

また、第三の矢である成長戦略が成功し、生産性上昇や潜在成長力が高まるといった状況にも至っていません。円安は輸出企業の金庫を現金でいっぱいにするだけで、大きなイノベーションのうねりは起こっていません。逆にアベノミクスが引き起こした株安や円安の上

に胡坐をかいて自己満足が支配しているようにすら感じます。また、東芝の例をみてもわかるように、短期的な株価を過度に重視する経営姿勢が、小手先の利益操作で不祥事の温床を作っています。間違った政策手段は、モラルハザードを引き起こしてしまう麻薬のようなものです。先に述べた「楽をして経済的に豊かになる」ことが勝ち組だという誤った価値観とどこか通じるものがあると感じているのは筆者だけでしょうか。

このような状況だからこそ、ファミリービジネス経営者の皆さんには大いに危機感を持ち、どのようにしたら世の中から尊敬される企業になれるのか、競争力の高い企業になれるのか考え、実践していただきたいと思います。理念の確立とその実践はその一つの方策でしょう。星野リゾートの星野佳路社長が強調するように経営理論の根幹にもう一度立ち返ることも必要かもしれません、いずれにしてもファミリービジネスの永続発展がない限り、日本経済の発展はありません。このことを指摘して本連載の結びとさせていただきます。長い間ご愛読ありがとうございました。